

## 乾隆朝の新教回民弾圧と新疆への波及

華 立

はじめに

- 一、西北回民の新疆進出と清朝皇帝の回民観
  - 二、乾隆四十六年サラール新教回民反乱と新疆への波及
  - 三、乾隆四十九年新教回民反乱と「従逆回民」大逮捕の波紋
  - 四、回経捜査事件
- おわりに

キーワード：乾隆朝、回民、甘肅省、新教（ジャフリーヤ）、弾圧、新疆への波及

### はじめに

乾隆後期の甘肅省には、四十六年（1781）と四十九年（1784）に、新教（ジャフリーヤ教団）回民による反清の乱が二度も勃発した。両反乱に対して、清朝はそれを厳しく弾圧し、多くの回民が迫害を受けた。これは清代回民史上の一大事件であるとともに、清朝の対回民政策の転換点でもあった。その後、回民社会と清朝当局との対立がしだいにエスカレートし、さらなる摩擦と激突が繰り返された。同治年間（十九世紀後半）、回民の武装蜂起が陝西・甘肅・新疆・

雲南などの各地で連鎖的に勃発し、西部中国を震撼させたのも、その延長線の事態といえる。

清代回民の反乱や武装蜂起については、これまでに複数の先行研究が行なわれてきたが、おもに清末の大蜂起の方に研究者の関心が集中している。他方、回民の反清闘争の発端となった乾隆期新教回民の反乱に主眼をおく研究では、おおむね反乱の展開過程に重点がおかれている。その過程の一部として統治者清朝の弾圧策が取り上げられているが、言及は甘肅地域に限られている。事件の清代回民社会全体への影響、弾圧措置の他の地域への波及をも視野に含めた論考は、わずかにとどまっている<sup>(1)</sup>。

上述の研究状況を鑑みて、本稿は、回民反乱発生後、清朝の弾圧措置がいち早く波及した新疆地域を取り上げたい。新疆に進出した回民移住者のなかで甘肅省出身者が大きな比重を占めていただけに、甘肅で新教回民の乱が起きると、他の地に移住している彼らにも清朝の矛先が向けられた。また、新教の甘肅伝来が新疆の地を経由していたことから、新教の拡散を嚴重に警戒する清朝は、同じイスラム文化圏である新疆を「危険な地域」とみなし、同地における宗教関連の取り締まりを全面的に強化した。本稿で

(1) 乾隆期甘肅の新教回民反乱をめぐる先行研究としては、中田吉信[中田 1961、1971]、呉万善[呉 1991]、張中復[張 2001]（文末の主要参考文献を参照）などが主要な成果として挙げられるが、中田[1961]は、乾隆四十六年のサラール新教回民への弾圧措置を中心に論じたのち、甘肅以外の地域への迫害拡大に触れてはい

るが、そこにとどまっている。一方呉と張の両氏は、「清代西北回民起義」、あるいは「事変」という視角から乾隆期の新教回民反乱を考察し、重心はその後の同治年間の大蜂起にかけている。なお張は、乾隆期新教反乱をきっかけに清朝の対回民政策が大きく変化したと指摘してはいるものの、具体的な言及はしなかった。

はまずそうした事実過程を辿った上で、統治者の政策による新疆における回民移住者の境遇の変化について分析を試みたい。

## 一、西北回民の新疆進出と清王朝の回民観

これまでの研究ですでに明らかになっているように、清代における甘粛・陝西回民の新疆進出は、およそ乾隆二十年代から始まったものである。そのきっかけは清朝勢力の現地進出であった<sup>(2)</sup>。

乾隆二十四年（1759）、宿敵のジュンガルを制した清朝はつづいて天山南路の回部地方をも平定し、古来の西域を「新疆」と名づけて支配下に置いた。広大な新領土を支配するに当たって、清朝はイリ将軍をはじめとする軍政体制を現地に布き、支配体制を整備するとともに、屯田や商業の振興による経済基盤の安定をはかり、内地民の新疆移住を積極的に提唱した。こうした変化にともない、内地と新疆間の往来が頻繁になり、内地住民の新疆移住が活発化した。

中国の西北部には、明代以来多くの回民が定住していた。ことに甘粛と陝西の二省に回民が密集し、全国で一、二位を誇っていた。文献には「陝則民七回三、甘則民三回七」<sup>(3)</sup>との記述があり、清代における二省の総人口に対する回民の割合が、陝西省では総人口の三割、甘粛省はその半数以上といわれる。新疆への進出・移住がさかんになるにつれ、回民も漢族移民とともにその一翼を担った。

乾隆二十年代から乾隆四十年代にかけて、回民の足跡はほぼ新疆の全域に及んでいた。移住

者の規模は、資料面の制約もあって正確な数字の把握は難しいが、相当数にいたったことは疑いない。また、移出地別でみれば、新疆に近接する甘粛省出身の回民がその大半を占めていた。回民移住者は移入地の新疆において、あるいは農業開墾に従事し、あるいは緑營兵士として兵糧生産や交通路維持の任務に当たったり、あるいは商人・運輸業者、または雇い労働者として活躍していた。そして、その中には、イスラム經典の学習を目的に新疆の回部地方へ赴く人もいた。

多くの先学が既に指摘しているように、中国における回民社会の形成には長い道のりがあった。その始まりは唐・宋時代にさかのぼるが、元代にも多くのイスラム教徒が西方から中国に來住した。しかし明代中期以降になると、政治の変動によって中国ムスリムと西方イスラム本拠地との連絡が断絶された。回民は中国社会に根づいてゆく一方で、イスラムに関する知識が後退し、宗教儀礼も形骸化していった。そうした状況のなかで十七世紀末から十八世紀にかけて、西アジアからスーフィズムが中央アジア経由で中国の西北部に流入すると、甘粛の地を中心に新しいイスラム教派を創出する機運が高まった。また、当時の回民の間では、より「西方」で行われている教がより「正統」な教であるとの考えが広がり、イスラム教の宗務者たちが西方への遊学を積極的に行った。後述する新教回民反乱の精神的支柱、新教（ジャフリーヤ）を創出した馬明心もすなわち、西方遊学後、新疆経由で帰郷した一人である<sup>(4)</sup>。

では、宗教目的を含めた回民の新疆進出・移

(2) 佐口透「新疆における中国回民」〔佐口 1986〕第292～306頁、拙稿「清代甘粛・陝西回民の新疆進出—乾隆期の事例を中心に」（塚田誠之編『民族の移動と文化の動態—中国周縁地域の歴史と現在』、風響社、2003年 第21～67頁）を参照されたい。

(3) 余澍畴『秦隴回務紀略』巻一。なお当時甘粛省の範囲には、現代中国の寧夏回族自治区および青海省の東

部が含まれていた。

(4) スーフィズムの甘粛省回民社会への流入については、黒岩高の「17—18世紀甘粛におけるスーフィー教団と回民社会」（『イスラム世界』43号、1994年6月、第1～26頁）を参照。また、馬明心の遊学先であった「西域」とはどこにあたるか、アラビア半島か、中央アジアか、あるいは新疆の回部地方かと、諸説に分か

住に対して、清朝はどのような政策をとっていたか？少なくとも乾隆四十六年までの段階では、回民と漢族を分別するような移住・管理策はみられない。つまり、回民か漢族かを問わず、新疆への移住者は一概に「内地民」というカテゴリで取り扱われたのだが、そうした対応は、清朝皇帝の回民認識にもとづいていた。代表例として、雍正七年（1729）四月の論旨を取り上げたい。

康熙年間から雍正年間にかけて、一部の清朝大臣から、回民の生活風習やイスラムの信仰を非難したり、イスラム教を中華社会では受け入れがたい「異端」として禁止すべきと要求する動きがあった。それに対して雍正帝は次のように述べた。

直省各処皆有回民居住、由来已久。其人既为国家之編氓、即俱为国家之赤子、原不容以異視之。数年以來屢有人具摺密奏回民自為一教、異言異服、且強悍刀頑、肆為不法、請嚴加懲治約束等語。朕思回民之有教、乃其先代留遺家風土俗、亦猶中国之人籍貫不同、嗜好方言亦遂各異。是以回民有礼拝寺之名、有衣服文字之別、要亦從俗從宜、各安其習、初非作姦犯科惑世誣民者比、則回民之有教、無庸置議也。（中略）要在地方官吏不以回民異視、而以治衆民者治回民、為回民者亦不以回民自異、即以習回教者習善教、則賞善罰惡、上之令自無不行、悔過遷善、下之自無不厚也<sup>(5)</sup>。論旨の要点は以下のとおりである。

1) 回民は国家の「編氓」である。すなわち漢族と同様に戸籍に登録されている国家の人民である。故に国家たるものも彼らを「一視同仁」すべき、すなわち差別的に取り扱うことはでき

ない。

2) 回民のイスラム信仰は、祖先から受け継いだ習俗である。他の中国人の場合には、本籍地と方言などの違いがあることと同じで、とくに異論をたてる必要はない。しかもこれまで、イスラム教徒による反逆的な行為が起きておらず、したがって邪教扱いする根拠もない。

3) 回民に対するにあたって、何よりも肝要なのは民を司る官憲が回民を「異視」、すなわち差別視をしないで、漢族の民と同じ施政を行うことである。そして回民もまた自らが「異」を標榜せずに、国家が提唱する「善」の道へ歩むようにするべきである。

上記の回民観は、乾隆朝になっても受け継がれた。回民の身分上の性格について乾隆帝は、「（回民）自其先祖以來、食毛踐土、蒙国家豢養深恩已百数十年、與民人同隸編氓、毫無區別」と述べ、回民は国家の籍にある「編氓」で、政策において「回」と「漢」は同一視されるとの原則を、父親の雍正帝と同様に明示した<sup>(6)</sup>。

しかしここで留意しなければならないのは、清朝皇帝のイスラム教容認は、あくまでも回民たちが清の国家支配に逆らわないことを前提としている。その前提に何らかの変化が生じた場合、清朝の対応が激変しうることも想定される。他方、政治支配上「回」と「漢」の同一視を堅持する清朝の立場を、別の視点に置き換えて読めば、回民が漢族とは異質のニスニック集団であることを認識しておらず、回民社会の特質に対応する政策を持っていない、という結論にも至る。それがゆえに、清代回民社会の内在的な発展が顕著になるにつれて、清朝の処置が当をえず、回民社会と権力側との衝突をもたらすと

ㄨ れているが、遊学後新疆を通して甘肅に帰り、新教を開いた、という点では諸説がほぼ一致している。

(5) 『清世宗実録』巻八十、雍正七年四月辛巳の条。

(6) 『欽定石峰堡紀略』巻十四。清朝皇帝が回民に対して基本的に漢族民と同一視しようとしていた点については、先学佐口透氏も、「官僚の方では回民を別民族

的存在と考えているのに対し、皇帝は一般中国人と同一視しようとしていることが分かる。清朝の皇帝は回民が反社会的行為をなさざる限り一般漢人と同じく待遇し、宗教的生活秩序の差違を理由として回民を抑制すべきではないという政策を持っていたことが一応結論される」と指摘している[佐口 1955、第164～165頁]。

いった可能性も必然的に増大してゆく。乾隆四十六年の新教回民反乱は、まさしくかかる矛盾が表面化したところで勃発した。

## 二、乾隆四十六年サラール新教回民の反乱と新疆への波及

乾隆四十六年の反乱は、甘肅省循化地区のサラール（撒拉）新教回民<sup>(7)</sup>によって勃発した。反乱の導火線はサラール回民間の旧新両教派の教争であったが、地方官憲の介入と処置失敗によって反清運動に展開することになった。

乾隆二十六（1761）年、嘉峪関外から帰郷した馬明心が、河州一帯で「新教」と呼ばれるジャフリーヤ派の布教活動を開始した。この新教は儀礼を簡略化して、布施の負担も軽減し、なお貧困者の救済に力を入れたため、多くの回民信者を引き付けた。翌二十七年（1762）、布教活動をめぐって馬明心と花寺門宦の馬国宝が相争い、双方が循化庁に訴え出たが、官憲は両者をともに罰して、循化から強制退去させた。三十四年（1769）、馬明心に師事した新教の賀麻六乎アホンが、同地のサラール十二工の総掌教韓哈済と対立し再び争ったあげくに、流罪に処された。教争の頻発は回民社会自身の組織化傾向にともなう教派の対立によるものであり、清朝はその内在的な原因をよく把握できず、当然の如く対策も見出せないままであった。しかも地方官憲の処理は公正性を欠き、旧教側に加担することが多いことから、新教回民の不満はつづいていった。

乾隆四十六年年初、旧新両教の争いが再燃し、械闘により双方から死傷者が続出した。そこで旧教回民が清朝官憲に介入を求め、新教の弾圧を公言した河州協副将新柱が現地へ向かう途中、

新教アホン蘇四十三など千余人に囲まれて殺された。これを機に新教回民は一気に反清の旗を掲げ、河州を陥落させ、さらには省都蘭州に迫った。蘭州の戦いで挫折した新教反乱軍は華林山に立て籠もり、同年七月、華林山の陥落で全員が戦死した。教主馬明心は反乱に直接関与していなかったにもかかわらず、反乱発生早々、三月に蘭州で処刑された。

サラール新教回民の乱は、回民集団と清朝関係史上の一大転換点となった。乾隆帝は新教回民への弾圧を敢行し、「凡新教之人、皆係賊党」「新教則如白蓮教等邪教、平日雖亦拝佛念經、而惑衆滋事、其名目斷不可留」と諭して<sup>(8)</sup>、反乱者の処罰と新教の取り締まりを同時に命じた。

乾隆四十六年五月上旬、華林山の激戦がまだ続いていた頃、烏魯木齊都統の奎林に二通の満文諭旨が届き、十数年前に同地へ流された新教アホン賀麻六乎の様子を至急確認するように、命令が下された。前述したように、賀麻六乎は馬明心に師事して、循化地区における新教の布教に大きな役割を果たした人物である。今回の反乱を発動した蘇四十三はすなわち彼の後任者にあたる。流刑に処されてから十余年の間、ウルムチの蘆草溝で服役中の賀麻六乎に対して清朝が特別な注意を払うことはなかったのに、馬明心の処刑を通じて新教信者の指導者に対する絶大な信頼と敬服を思い知らせられた乾隆帝は、遠く新疆にいる賀麻六乎の存在に大きな不安を覚えた。五月七日の上諭には

奎林に急いで届けよ。阿桂が上奏した、（乾隆）三十五年（1770）に流罪で烏魯木齊に流された甘肅省邪教回子賀麻六乎が現在（そちらに）居るかどうかをきちんと調査し、もしいまなおその地に居住して、何らかの邪教を興して愚昧な民を誘惑するような事情があれば、

(7) サラール回民は今日では、回族とは別に、サラール族（撒拉族）として認定されているが、清朝当時ではムスリムであることから、一律に「回民」と称された。

その集住区の循化地区は今日の青海省循化撒拉族自治县。

(8) 『欽定蘭州紀略』巻七。

騒ぎ立てないで直ちに捕らえて処刑せよ。もし本当にひっそりと暮らしていれば、彼を嚴重に管理しておこう<sup>(9)</sup>。

とあったが、その翌日、皇帝はさらに前日の諭旨に修正を加えた。

賀麻六乎は以前（新教の）頭目だった悪質な罪賊であり、仮にそちらでひっそりと暮らしていても、とにかく烏魯木齊に（そのまま）留めて置くわけにはいかない。（中略）今賀麻六乎の身柄がそちらにいれば、同地で処置することをとりやめ、直ちに優秀で信頼できる官兵を派遣し、道中で脱走することのないように北京まで移送して来い。なお、今度の護送にあたって、もしもハミ、トルファン、蘭州など（を経由して）内地を通過するなら、彼の輩らに遭遇し、再び奪い返されてしまうことが起こりかねない。奎林は派遣官兵にきちんと指示し、辺外のウリヤスタイを経由して護送し、軍台の道から迅速に急いで送ってくるようにして、絶対に脱走に至らせてはならない<sup>(10)</sup>。

として、賀麻六乎の影響力を危惧して、新疆の地に留めておいてはならないこと、移送途中で新教信者に奪い返される危険性を極力回避し、北方の草原地帯を通過して北京へ連行するように指示した。

その後奎林の調べで、賀麻六乎は病気で四十二年（1777）に同地で死去したことが判明した。その報告を受けて乾隆帝は、「それならとことん追究する必要もないのだ」とコメントし、一先ず胸を撫で下ろした様子であったが、初日の諭旨を直ちに修正して再送し、賀麻六乎の護送ルートまで細かく指示するなど、やはり異常な対応をしている。これは単に賀麻六乎が新教の

重要人物であったという理由ではなく、新教と新疆地域との深い関わりに乾隆帝が驚き、神経をとがらせていた様子が窺える。

乾隆四十六年八月、阿桂、李侍堯の手による「辦理蘭州軍務善後事宜」に、新教を根絶する措置として次のような内容が盛り込まれた<sup>(11)</sup>。

- 一、蘭州、涼州等に備え付けてある大砲を新式のものに改める。
  - 二、すでに新教を習った者を旧教に改めさせ、新教の礼拝寺を毀し、もしひそかに新教を伝習する者があれば、邪教律に照らして処置する。回民に諭して、アホンの名目を称することを許さず、回民内から老成の人選んで郷約に充当し、もし異教を唱える者があれば直ちに告発させる。
  - 三、サラール回民は今後、循化・河州で衙役および營伍兵丁に充たることを許さない。また任意に内地へ行くことを許さず、各州県村鎮に貿易に赴こうとする者は、循化同地から照票を給与され、期限を定められる。
  - 四、甘肅各地で硫黄を私掘、私販することを嚴重に取り締まる。
  - 五、内地回民は新疆に赴き、そちらの經典を尊崇するので、今後内地回民が新疆へ行って回經を学ぶことを許さない。また新疆のウイグル人で罪を犯した者は内地へ送らず、新疆各地で互いに安挿させて、新教の流入を防ぐ。
  - 六、循化に參將一員、兵八百を配置し、河州太子寺に州判一員を設け、番回の乱に備える。
- 上記六条項のうち、一、三、四、六の条は甘肅省、とりわけ反乱の勃発地であった循化地区の支配強化に重点を置き、他方、二と五の兩条は、回民の宗教生活に制限を加えることにより、ムスリム社会の連帯関係を断ち切り、新教の拡

(9) 中国第一歴史档案館所蔵「軍機處滿文録副奏摺」（以下は滿文録副と略記）、乾隆四十六年五月二十六日奎林の奏（フィルム請求番号：121-2768-2764、以下同様）による。当該史料の日本語訳に関しては、萩原守（神戸大学）、堀直（甲南大学）両氏から貴重な

助言をいただいた。記して謝意を表したい。

(10) 「滿文録副」乾隆四十六年五月二十六日奎林の奏（121-2768-2764）による。

(11) 『欽定蘭州紀略』巻十六。

散を防止しようとしていた。第二条の禁令が全国各省の回民居住区を対象としているのに対して、第五条はもっぱら新疆地域に着目するものであった。

その理由について李侍堯はさらに、

回教相沿已久、而新教則自馬明心口外回家、妄謂西域得有真傳、愚回厭故喜新、俱為煽惑、以致蘇四十三等肆逆不法。

とし、または、

新疆各城回衆以墨克（すなわちメッカ）地方為回教之宗主、而内地回民又以新疆等處經典多而流傳為較真。前奉諭旨俟將來事竣後傳諭新疆各路辦事大臣嚴密查訪、毋許内地回民在彼學習回經致生事端、實為防微杜漸之至計。臣等尚恐各城將緣事回民發至内地、此等大概皆不安本分之徒、與内地回民皆係同教、倘因其自西而來以為得有真傳或又相煽惑、均未可定。應請敕下新疆各路大臣、此後回民有犯發遣等罪者、或於各城相互安插、不必改發内地、於杜絕新教根株之法更為周備<sup>(12)</sup>。

と述べ、馬明心の新教創出は、新疆地域のイスラム經典に影響されるところが大きかったがゆえに、新教の根絶に全力を挙げたい清朝にとって、双方の関係を断ち切ることが急務であるという。内地回民の新疆でのイスラム經典學習の禁止は言うまでもないことだが、他方、新疆のウイグル人犯罪者が内地に流されることで、両者に接触の機会をもたらすことも危惧すべきなので、その規定を廃止するよう求めた。

上記の方針にもとづき、反乱平定後、在新疆の回民移住者に対する監視体制が大幅に強化された。乾隆帝の満文上諭では

馬明心が辺外の回子のところに行き、真伝を学んだという話が、たとえ一つの架空話であっても、新疆各地に居る回子が少なくないので、中から再び馬明心のような内地回子（民）が新疆の地へ行って邪教を創出し、思うままに愚回らを煽動して教を興し、事件を引き起こすことは、まったく予測しかねる。事件は必ず芽生えの状態で片付けなければならないので、予め計画を立て、注意深く調査を繰り返して対処するべきである。

とあり、新疆各地における回民移住者の動静を徹底的に調査し、新教活動を発見しだい、直ちに逮捕して、「民衆に戒めを示せるよう」当事者を重罪に処するように命じた。また、「今後もし所管地方の回民の中に静かに暮らしていない者はいないか（の状況）について、毎年の暮れに一度聞かせて上奏せよ」として、監視体制の恒久化を要求した<sup>(13)</sup>。

下表が示すように、乾隆四十六年九月から約一年半の間に（四十八年一月まで）、22通もの上奏文が新疆の各地から清朝廷に上っていた。北路ではイリ、タルバガタイ、クルカラウス、ウルムチ、南路では南八城およびハミ、トルファンにおいての新教取り締まりの実態が報告されている。その文面からは、官憲らが回民の動態を把握しようとして、流動性の高い回民商人を重点に監視を強め、郷約体制や路票制度の強化、回民移住者の集会場所である礼拝寺（回民モスク）への査察を行うなど、さまざまな対策が講じられたことがわかる<sup>(14)</sup>。その結果として、各城から新教関係者を新たに発見できなかったが、回民移住者を取り巻く政治的環境は従来と大

(12)『欽定蘭州紀略』卷十六。

(13)『満文録副』乾隆四十六年九月十五日ハミ辦事大臣佛徳の奏（122-2368）による。

(14)たとえば、タルバガタイ（乾隆四十六年九月二十八日惠齡の奏 122-2991）とカシュガル（乾隆四十六年十月二十一日景福の奏 123-0374）では、商民中心の調査が行われた。ハミ（乾隆四十六年九月十五日佛徳

の奏 122-2367）では、現地の回民移住者を調査した上で、同地に建てられた二つの回民モスクをも査察し、回民はウイグル人と分かれて礼拝していることを報告した。なおウシュ（乾隆四十八年正月十九日綽克托の奏 126-1609）では、邪教の早期発見につとめて、今後も管轄地域内の回民モスクに対する監視を引き続いて行うことを決め、皇帝に報告した。

新疆各地の新教取り締まりに関する上奏の一覧表

上奏文の日付	標 題①	出 典②
46年 9 月15日	査哈密等処是否有撒拉回民伝播邪教	122-2367
9 月19日	査哈喇沙爾有無撒拉回民伝播邪教	122-2491
9 月27日	奏査伊犁有否撒拉回民伝播邪教	122-2923
9 月28日	遵旨査報塔爾巴哈台是否有撒拉回民伝播邪教	122-2991
10月15日	査庫車有無撒拉回民伝播邪教	123-0056
10月15日	遵旨曉諭庫車、沙雅爾等処回子伯克等緝拿伝播邪教之撒拉回	123-0067
10月21日	喀什噶爾、英吉沙爾等処査禁撒拉回民伝播邪教	123-0374
10月21日	査烏魯木齊、吐魯番等処有無撒拉回民伝播邪教	122-3544
10月21日	査庫爾哈喇烏蘇等処有無撒拉回子馬明心伝播邪教	122-3577
10月27日	査葉爾羌、和闐有無撒拉回民伝播邪教	123-0474
11月15日	査禁烏什等処撒拉回民伝播邪教	123-1019
11月16日	奏哈喇沙爾地方回子安居樂業並無邪教	123-0893
47年 1 月 6 日	奏烏什、阿克蘇等処回子並無伝習邪教之事	123-2305
1 月12日	査和闐地方並無伝播邪教者	123-2643
1 月15日	査塔爾巴哈台並無伝播邪教之人	123-2524
1 月21日	奏報伊犁回子並無伝播邪教之人	123-2743
1 月26日	哈密回子內並無伝播邪教之人	123-2775
3 月17日	遵旨嚴査塔爾巴哈台地方有無伝播邪教之人	124-0877
12月22日	遵旨彙報烏魯木齊等処回民並無興邪教之人	126-0851
48年 1 月19日	奏報烏什等処內地回民並無伝播邪教	126-1601
1 月19日	奏請派員密査烏什等処內地回民作札拜処所片	126-1609
1 月29日	奏報伊犁奏行商內地回民無邪教事	126-1799

（出典：軍機処滿文録副・乾隆朝）

①上奏文の標題は『清代辺疆滿文檔案目録』（広西師範大学出版社 1999年）第八・九冊を参照。

②出典の欄に表示されている数字は、それぞれの檔案文書のマイクロフィルムの巻号－コマ番号（開始のところのみ）である。

く変わりはじめた。

### 三、乾隆四十九年の新教回民反乱と「從逆回民」大逮捕の波紋

乾隆四十九年（1784）四月、新教回民による反乱が甘肅省において再発した。反乱者は固原で乱を起し、その後、靖遠、安定、会寧、伏羌、隆徳、静寧、秦州、秦安、華亭、莊浪など多くの州県を攻略して、ついには通渭県の石峰堡に拠点を構えて清軍と対峙した。この反乱が固原・小山地方の新教アホン田五と馬明心の妻

弟張文慶を中心に起きたため、文献では「田五・張文慶の乱」とも称される。

二ヶ月ほどつづいたこの反乱は、三年前のサラール新教回民反乱に比べて期間的にやや短いですが、統治者清朝に与えた衝撃は前回以上に大きいものであった。なぜならば、前回の反乱が一局地の循化地方のサラール族新教回民によるものであったのに対して、この反乱は甘肅省回民社会の主体をなす、今日の回族に当たる回民たちによるものであった。また、前回には回民内部の旧新両派の教争が起因で、清朝官憲の処置失敗によって反清運動に転じた、という経緯が



あったが、この反乱は最初から清朝に立ち向かうとして、教主馬明心の復讐を公然と叫んでいた。しかもその反乱に身を投じた回民は新教徒ばかりか、一部の旧教回民も反乱に関与した。この事実に対して乾隆帝は、

朕于此事再四思維、反躬自問、自臨御以來數十年、兢兢業々、不敢稍存滿假、于民生疾苦、無不時時廬念、務期得所、而于甘肅省尤加意撫恤。該省連年以來並未聞水旱災欠、斷無貧黎失所、致匪族得乘機誘惑、或地方官勒索苛派、苦累百姓、因而賊人唱亂滋事、……以上種々情節、思之總不得其故、究竟因何而起、不得不徹底根究<sup>(15)</sup>。

と述べ、反乱の起因に困惑して落胆する様子を隠せなかった。

今回の甘肅回民反乱に対して、乾隆帝は容赦なく極刑に処する方針を定めた。前線將校に与えた指令では、「(回民を)概して洗剿せよ」、「根株を残してはならない」などと、極刑方針が再三に強調され、「先に賊に追従し、その後投降した」回民でも酌量の余地がないとして、「十五歳以上の者であれば例外なく処刑する」<sup>(16)</sup>とした。先学によれば、鎮圧の過程において少なくとも一万人以上の回民が殺害された。そのうちには婦女一千名ほども含まれているという<sup>(17)</sup>。また、隆徳県の底店で反乱者を処刑する際に、訊問も執り行わず、逮捕された回民を「点呼しながら処刑に移った」というような残忍な虐殺の記録が、鎮圧過程の報告集である『欽定石峰堡紀略』に生々しく書き残されている<sup>(18)</sup>。

しかし回民への迫害はまだ終わらなかった。

反乱者を「一網打尽」にし、再起の可能性を根絶しようとして、「縁坐法」の適用、すなわち彼らの親族をも連座制によって逮捕して処刑するように命じられた。この指令が在新疆の回民たちを指名手配の嵐に巻き込んでいった。

乾隆四十九年八月、反乱者陣營の重要人物、大通アホン馬四娃の実兄蘇万成（または蘇旺成と書く）が、携眷屯田兵としてイリに在住していることが判明した。馬四娃本人は幼い頃から馬姓回民の養子となり、実家と生活を共にしなかった。蘇万成もまた長年の軍営生活で、早くから故郷を離れていた。そうした実状であったにもかかわらず、蘇万成は逮捕・処刑の運命を免れなかった。妻と二人の幼い子女は流罪にされた<sup>(19)</sup>。

こうして新疆を「縁坐犯属」（縁坐法にあたる犯罪者の親族）の集中地域であると確信した清朝は、次々と捜査の指令を出した。以下が档案文書よりみたその事例の一部である（すべてが乾隆四十九年のもので、以下は年号を省略する）。

六月二四日、アクス辦事大臣国棟より上奏。主犯田五の実弟田奇（田七）を同城にて逮捕したという<sup>(20)</sup>。

七月一六日、靖遠県「從逆回民」拝有の父拝一相、哈光徳の叔父哈治娃子をアクス城外の旅店で逮捕したと報告された<sup>(21)</sup>。

八月二日、カシュガルからの報告により、「從逆回民」馬四輩子の父馬奉挙以及張文孝が同地で逮捕された。また、上記の拝一相が以前、貿易のためにアクスとカシュガル間を往復したことも、官庁の路票記録で確認された<sup>(22)</sup>。

(15)『欽定石峰堡紀略』卷十一。

(16)『欽定石峰堡紀略』卷十一に、「将来查辦時、凡属先已從逆、後始投降之匪徒、年在十五歳以上者、俱應駢誅」とある。

(17)呉万善[1997]第46～47頁。

(18)『欽定石峰堡紀略』卷十五に、「底店從逆回民於初十日、明亮派兵陸續解送隆徳、十一日、一面点名、一

面正法」とある。

(19)東洋文庫所蔵『奏稿』（以下同様）第十八冊。

(20)「滿文録副」乾隆四十九年六月二十四日国棟の奏（131-2335）。

(21)「滿文録副」乾隆四十九年七月十六日国棟の奏（132-81）。

(22)「滿文録副」乾隆四十九年八月二日保成の奏（132-81）。



八月七日、ハミ辦事大臣巴延三より上奏。「従逆回民」沙重文の父沙一珍、弟沙重武、および胡剛の弟胡魁と胡四（胡鰲）らの四人を同地で逮捕したという<sup>(23)</sup>。

八月一六日、陝甘総督福康安より上奏。田五と反乱を共謀した靖遠県回民哈文、哈文徳、拝有、黄彩ら四名の親族ら数人をウシュで逮捕したという<sup>(24)</sup>。

八月一八日、イリからの報告。同地で行商していた靖遠県回民妥応得、妥拳娃子、妥阿利子、王之得らの四人を「従逆回民」の親族として逮捕したという<sup>(25)</sup>。

九月二日、タルバガタイ領隊大臣より報告。同地で逮捕された貿易回民を甘粛へ連行する件で陝甘総督に打診したという<sup>(26)</sup>。

十月二六日、陝甘総督福康安より上奏。指名手配された甘粛省籍回民三十人のうち、二十一人がすでに逮捕されたと報告した<sup>(27)</sup>。

十月一八日、ハミ辦事大臣巴延三より上奏。すでに逮捕されている沙一珍ら四人に加えて回民胡徳をも同地で逮捕し、彼らの妻子とともに蘭州に連行したという<sup>(28)</sup>。

十一月二十四日、陝甘総督福康安より上奏。タルバガタイ、ウシュ、ウルムチ等の地で「縁坐犯属」の黄宜、哈礼、鉄阿都子、鉄印、哈明、穆昇栄、妥江、妥六十五、劉天俸、馬宗、馬中相、馬呼腮子らが新たに逮捕されたという<sup>(29)</sup>。

以上に挙げた数十名の在新疆回民のうち、大半が乾隆三十年代から四十年代初頭にかけて新疆に赴いたもので、もっとも早い人は乾隆二十年年代の後半に故郷甘粛を離れ、以来新疆で生活

を営んでいた。新疆各城の大臣らも、これらの回民は「出口して謀生しており、子や兄弟が原籍地に在って謀反に関与した事情は知らない」と認めるが、「法律に依り縁坐すべき」として、あえて彼らを虐殺の対象者に加えた。

新疆全域に及ぶ大捜査には、直ちに行き過ぎが生じた。指名手配のリストに含まれない甘粛籍の一般回民をも任意に拘束・尋問したりして、迫害はさらに拡大していった。陝甘総督福康安の報告によれば、新疆から甘粛に連行されたいわゆる「縁坐犯属」のうち、その半数近くが非指名手配者であるといった誤逮捕だという。回民馬廷相（馬廷祥とも書く）と鉄文喜ら十数人の逮捕がその典型例である。

靖遠県出身の貿易商人馬廷相、馬文禄、馬如能、馬蒼の四人は同年十月にカシュガルで逮捕され、そのままアクスに連行された。しかしアクス辦事大臣国棟の再審により、四人のいずれも指名手配のリストに含まれておらず、本籍地が反乱者の多い靖遠県であるという理由だけで拘束されていたと判明した<sup>(30)</sup>。他方、靖遠県出身の回民商人鉄文喜などの九人もまったく同じ理由でヤルカンドの官憲に逮捕された。当時28歳の鉄文喜は、乾隆三十六年（1771）に父親とともに故郷を離れ、乾隆四十一年（1776）から、ピチェン、アクス、ヤルカンドで貿易を営んでいた。その後、清朝は彼らを実質的な「善良回民」と認め、釈放しよう命じたが、釈放令が届いた時は既に、九人中の一人、ヤルカンドで拘束中の商人マ・シ・ピン（Ma: Masi pin）は首を吊って自殺していた<sup>(31)</sup>。自殺の理由は上奏文

449)。

(23)『満文録副』乾隆四十九年八月七日巴延三の奏（132-367）。

(24)『奏稿』第十七冊。

(25)『満文録副』乾隆四十九年八月八日伊勒図の奏（132-1101）。

(26)『満文録副』乾隆四十九年九月二日惠齡の奏（132-1504）。

(27)『奏稿』第十七冊。

(28)『満文録副』乾隆四十九年十月十八日巴延三の奏（132-2855）。

(29)『奏稿』第十七冊。

(30)『満文録副』乾隆四十九年十二月十三日国棟の奏（133-1110）。

(31)『満文録副』乾隆四十九年十月二十六日阿揚阿の奏（132-3549）。

で触られておらず不明だが、おそらく監禁の恐怖に耐え切れず、死に追いやられたのではなかろうか。

#### 四、回経捜査事件

「回経」すなわちイスラム經典の所持をめぐるとこの捜査事件は、乾隆四十九年十月、「従逆回民」大逮捕の後半に起きた。同地における回民移住者の宗教生活、及び清朝の弾圧策の一端を、この事件から垣間見ることができる。

関係者の供述からみた事件の概略は以下の通りである<sup>(32)</sup>。

年班朝覲で北京へ赴くカシュガルベク莫羅爾咱は荷車の御者として、甘肅省西寧県出身の回民韓得（韓徳とも書く）を雇った。その一行がクチャの関所を通過する際に、韓得の車の中から二部の回経が見つかった。回民反乱再発直後という非常時期にあり、その事態を重くみたクチャの官憲は韓得と彼の関係者を直ちに拘束して尋問し、雇い主のベク莫羅爾咱の荷物捜査まで、所定の検査免除の優待策を無視して強行した。

尋問の結果、二部の回経は、それぞれ甘肅省靈州籍の回民馬起蛟と同省秦安県籍の回民馬輝徳の所有であると判明した。馬起蛟は、乾隆三十年代に肅州に寄寓したのち新疆へ進み、以来アスク、クチャ、ウルムチなどの地で商業に従事していた。家伝の回経七冊は日頃から所持していたという。彼は乾隆四十六年、一時帰郷のため回経を阿克蘇在住の「同姓聯宗」（同姓で同一宗族であること認め合う）の馬国英に預けたが、四十九年に再び出口してきて、馬国英から回経を取り戻そうとした。馬国英はアクスに

立ち寄った韓得にこれを託し、クチャにいる馬起蛟に渡そうとしたという。他方馬輝徳の場合は、彼が乾隆四十五年（1780）に貿易のためにアクスに至り、回経四冊を手元に持っていた。しかし行商で移動中にその回経が河水に濡れてしまい、このままでは破損がさらにひどくなることを恐れて、韓得を通じてハミで毛皮加工場を営む知人の馬応見に預けようとしたという。

回経はイスラムの教理を伝達する至高の權威を有する書物であり、回民信者に対して莫大な影響力を有している。清朝もまたその「危険性」を知り、取り締まりの一環で新教經典の流布防止に力を入れていた。新教の教義・教理・儀礼などが新疆回部地方より流入したという伝承があるだけに、同地における新教經典に対する統治者の監視の目も厳しい。しかし新教信者は弾圧されるほど自らの經典を固く守り、秘密を徹底するため、その所在を突き止めることが難しく、その結果かえって多くの冤罪をもたらした。よく知られている例としては、サラール新教回民反乱後の乾隆四十七年（1782）、広東崖州の回民海富潤が抄録回字經二十一冊を所持して広西に赴いたところ、悖逆の書を所持したかと桂林の官憲に投獄された、という事件がある。これを皮切りに他の省でも回経の押収や回経を研究するムスリム学者の逮捕が相次いだ。しかしその騒動は結局、一連の行き過ぎと断じられ、当事者はようやく釈放された<sup>(33)</sup>。

今回の捜査事件もまた上記の海富潤事件とよく似た展開となった。事件の最終処理にあたった陝甘総督福康安は、「四犯訊非馬明心族党、平日貿易營生、別無不法情事、其所攜帶經卷実係尋常誦習之經、本不在查禁之例」<sup>(34)</sup>として、韓得、馬起蛟、馬輝徳、馬国英の四人は馬明心

(32) 韓得をはじめとする回民関係者の供単は、「滿文録副」と「滿文月摺檔」（中国第一歴史档案館所蔵）の両方に同文で収録されている。「滿文録副」のフィルム番号は132-2271、「滿文月摺檔」のそれは214-304(2)-084となっている。

(33) この事件については『清高宗実録』巻一一五八、乾隆四十七年六月戊辰の条、同巻一一五九、同年六月癸未の条、丁亥の条、同巻一一六〇、同年七月丁酉の条などに見られる。また中田論文[1961]を参照されたい。

(34) 『奏稿』第二〇冊。

の新教信者ではなく、日ごろ貿易を営んで生活し、不法な行いはないとした。なお彼らが所持していた經典は日頃の誦読に使用されており、新教經典とは異なり、査禁の対象に当たらないと結論づけた。

果たしてその四人の回民が新教とは無関係な人物であったのか、それとも新教関係者でありながらその関係を終始隠しえたのかについては、現時点では史料が不足しているので判断を下せない。それをさておき、残された当事者らの供述記録は、在新疆回民移住者の宗教生活、さらにはそうした宗教的活動に対する清朝当局の心理状態を知るのに、重要な手がかりを提供してくれるもので、熟読に値する。したがって次いでは官憲の筆録を一部引用して、若干の分析を加えることにする<sup>(35)</sup>。

#### (1) 回民馬起蛟の供述と官憲の尋問

訊據庫車貿易回民馬起蛟即二阿渾、又名伊底爾斯供、年四十六歲、祖居靈州寄籍肅州人。小的於三十二年出門、在阿克蘇、葉爾羌等處貿易生理、於三十六年回家一次、於四十二年又出門到口外貿易。四十六年回家時、有小的侄兒馬國英、小名伊斯瑪依爾、在阿克蘇貿易生理。因小的行李頗重、將隨帶回子經七本留存馬國英舖內。今年小的復出口外到烏魯木齊貿易、三月內自烏魯木齊起身前來南路各城貿易、六月內到了庫車、寄信與小的侄兒馬國英將前留經卷遇有順人帶至庫車、今接馬國英來字、將經交與韓得帶去了。但這經原係小的祖上遺留相傳至今、小的於四十二年自內地帶到口外的。至馬國英如何認識韓得、託他帶來的、小的並不知情、不敢謊供是實。

詰問：你是內地回民、將這經帶到新疆地方、必是有意惑亂回子滋生事端。況你從前在南路各城貿易多年、其中有無與本處及各城回子交

涉之處亦未可定。但現今查出你來往書札內均係稱你馬二阿渾、又因何呼伊底爾斯回子之名、逐一據實供來、如若謊供就動刑了。

馬起蛟供：小的於六月內纔到庫車、七月內寄信與侄兒馬國英要取這經、實在並未與庫車回子交接。但小的雖在各城往來、不過貿易爲生、小的這經只是悶來時看誦、他們回子並不知道我有經的、小的亦並未與他們交涉。至衆人稱我阿渾、因我們回民規矩、但是通達經卷者即呼阿渾、是以他們俱以阿渾相稱。小的因不敢當、亦曾向他們再三辭過的。再伊底爾斯原是小的自幼起的乳名。

又詰問：你帶這經、雖未與本處及各城回子交涉、而內地回民在各城貿易者居多、其中曾否與何人交接傳習？但這經卷既是你祖上遺留、有何憑據、又有何人知道呢？據實供來。

又據馬起蛟供：小的在口外貿易、原是安分生理、並不敢爲非、與內地回民交接生事。況各城稽查甚是嚴謹、若果有滋事之處、豈有查不出來的呢？小的祖上遺留這經、原籍地方現有小的姐夫李志、妻兄武生周尚志、鄉友楊君春、馬生、楊大中、楊仲元可証、他們都是知道的、只求關提到案究問、就沾恩典了。

#### (2) 回民馬國英の供述

訊據由阿克蘇解到回民馬國英、乳名依斯瑪依爾供、年三十七歲、係固原州人。小的於三十二年出門、在阿克蘇貿易生理。小的叔父馬起蛟亦在阿克蘇貿易、於四十六年間因小的叔父回家、將大小經七本寄留小的處。今年馬起蛟又來口外、在庫車貿易、七月內寄信前來要取經卷、適有自喀什噶爾來的車戶韓得往哈密去、小的就託他將經帶到庫車交給叔父馬起蛟查收。但馬起蛟原係小的連宗之叔、並非同堂伯叔、這經實係馬起蛟自內地帶到口外的、其是否係伊祖上遺留、小的相隔甚遠、實是不知

(35) 出典は同前掲注(32)、ただし供單の原文は漢文である。

情は實。

### (3) 回民馬輝徳の供述

訊據由阿克蘇解到回民馬輝徳供、年三十五歲、係秦安縣人。小的於本年五月內到阿克蘇貿易生理、原來時帶有經四本、因路途過河曾被水濕一次。小的原是在各處往來貿易爲生、惟恐復被水濕磨破、甚屬可惜、是以託車戶韓得帶到哈密、交給小的朋友馬應見處查收的。但這經原係小的自幼在學房抄錄的、隨身帶着、閑時看誦、並無別故是實。

上記の対談からは少なくとも以下のことが指摘しうる。

第一に、回民は出口して新疆の地で生計を立てるようになって、ムスリムとしての義務を遵守し、日常に信仰生活を続けていた。この点について乾隆四十六年にハミからの報告にも、同地では回民移住者の礼拝寺（モスク）が二箇所に建てられ、内地からの回民は土着のウイグル人と分かれて、この二つのモスクで礼拝を行っていた、とされている。他方、馬起蛟と馬輝徳のような貿易回民が、回経を所持して移動し、暇になればそれを学習していたというのだが、そうしたケースはおそらくほかにも多数存在していたと考えられる。

第二に、所持していた回経について、馬起蛟は先祖代々のものを継承したのに対し、馬輝徳はかつてイスラム学校で習っていた頃に抄録したと答えている。いずれにせよ、二人はともにイスラムの専門教育を受けた人物であるとみてよい。とくに馬起蛟は「通達経巻」すなわち經典に精通しているため周囲からの信頼が厚く、「馬二阿渾」と呼ばれるようになっていた。本人は宗務者であることを否認したが、周囲の回民に影響力を持っていたことが容易に推測される。また回経の転送を引き受けた回民車戸韓得にも注目する必要がある。彼は河州に近い西寧

県の出身で韓姓であることから、サラール回民の可能性を排除できない。なお、彼も他人にアホンと呼ばれており、上記の馬起蛟と同様に、ほかのムスリム信者から尊敬される立場にいた人物と考えられる。クチャの官憲が彼の車内から回経を発見すると、顔色が変わって直ちに厳重な警戒態勢をとったことも、そこに理由があったと思われる。

第三に、清朝官憲は尋問にあたって、回経の性格究明、すなわち邪教たる新教の經典かどうかに関心を向けたが、同時に回民ムスリム同士の社会的連係をも追究の重点とした。長年新疆で貿易した甘肅回民の馬起蛟に対して、官憲は、「你是内地回民、將這經帶到新疆地方、必是有心惑亂回子滋生事端。況你從前在南路各城貿易多年、其中有無與本處及各城回子交涉之處亦未可定」と問い詰め、土着のウイグル人に接触し、何らかの宗教的交渉を持っていたのではないかと、強い不信を抱いていた。他方、仮に土着のイスラム勢力との交渉がなかったとしても、「内地回民在各城貿易者居多、其中曾否與何人交接傳習」として、彼とほかの新疆在住回民との間で何らかの宗教活動を展開していたのではないかと、疑心を抱いていた。逮捕された回民の韓得、馬起蛟もまた権力者の狙いを察知し、接触と交渉については一切を否定した。しかし回経をめぐるこの数人の関係からみても、回民の間に相当活発な社会的連係が存在したことは事実であろう。とくに回民社会に貿易商人や、韓得のような運輸業者が多くいるため、彼らが繋ぎ役として、社会的ネットワークづくりに重要な役割を果たしていたと考えられる。また馬起蛟と馬国英のように、漢族中心の社会に普遍的な「同姓聯宗」の習慣を持ち、互いに同一宗族の構成員であると認め、親戚の付き合いをしていたことも確認できる。イスラム同教者の立場による親近感と連帯意識に加えて、血縁的關係も回民移住者の結合に強く作用していた

と思われる。

乾隆四十七年の回経所持事件が当事者らの無罪釈放で幕を閉じたのと違って、この回経捜査事件は、上に述べた諸々の要素が絡み、馬起蛟らの回経所持は違法ではないと断じたにもかかわらず、無罪釈放にはならなかった。半年越して下された判決は、「均して雲南、広西などの煙瘴地方に送り安挿して管束する」という、重罪も同然のものであった。その後福康安が異議を申し立て、刑の軽減を求めた結果、二度目では、「流罪としてウルムチに送り管束せよ」と改められた。遠方への流刑は免れたものの、同じく流罪の身として新疆に残留せざるを得なくなった。軍機大臣はその理由について、

携帶尋常経巻出口、雖不在查禁之例、擬以煙瘴、固属可矜、然竟從寬貸、亦不足以示儆<sup>(36)</sup>。

とし、普通のイスラム經典を所持して新疆へ移動することは、査禁の例に当たらないと認めても、回民に戒めを示すためにあえて重く処置せよといった理不尽な回答であった。同案で唯一対象外とされたのはハミ在住の馬応見であった。回経がクチャで発覚されたため、「情況を知らず、実の関わりが無い」とみて、処罰から外したのである。

## おわりに

乾隆中後期甘肅省で二度発生した新教回民の

反乱は、同省のみならず、清代回民社会全般に大きな影響を及ぼした。新疆の回民移住者を巻き込んだ一連の迫害・殺戮の惨劇は、乾隆五十年に入って終焉を迎えたが、新教敵視という統治者の立場は、清朝末年まで変わることがなかった。また、前述で明らかのように、いわゆる新教弾圧は、回民の人身迫害や、彼らの従来の生活秩序の破壊を通して行われている。その結果、信仰上の自由はおろか、回民の社会地位と生活環境をもともに悪化させた。

他方、二度の壊滅的な打撃を受けた新教のジャフリーヤ派は、しばらくは清朝統治者の前から姿を消したものの、決して解体しなかった。彼らはひそやかでながら確実に生き延びてゆき、信者たちの驚異的な忍耐力と団結心によって組織はいっそう強靱になった。そのなかでも、新疆はジャフリーヤ派重要拠点のひとつになっていた。乾隆四十六年以来流罪でイリに強制連行された多くの反乱回民の女性親族とその追隨者たち<sup>(37)</sup>、また、甘肅での生存環境を失い、新疆への脱出を余儀なくされた人々など、新教回民はさまざまな形で新疆に集まってきた。彼らは新疆の地で暮らしながらもなお故郷にいる宗教指導者を思慕し、両地の間ではつねに緊密な連携関係があったとみられる<sup>(38)</sup>。

乾隆期の激動から八十年が経ち、清末の同治初期になると、新疆では陝西・甘肅二省について大規模な回民武装蜂起が勃発した。いわゆる「トンガン（東干とも書く、新疆在住の中国

(36)『清高宗実録』卷一二二八、乾隆五十年四月己丑の条。

(37)流罪で新疆に流された新教女性信者について、『欽定蘭州紀略』卷十三、阿桂の上奏に「搜獲各犯家屬婦女幼孩共五百名口、除陸續監斃並逆者家屬正法共一百八十五名口外、現監禁婦女二百五十九口、幼孩八十三名、將婦女發往伊犁、賞給索倫營、察哈爾營、厄魯特營兵丁為奴、幼男發往雲南普洱、廣西百色極邊煙瘴地方充軍」とある。そのなかに教主馬明心の妻張氏と二人の幼女も含まれていた。また、『欽定石峰堡紀略』卷十九をみれば、二回目の反乱においても一部の女性信者がイリに流されていたことがわかる。なお、流刑

地のイリで彼女らがどのように扱われたかについては、『滿文録副』にもとづいて検証が可能になっている。本稿の論述はその点に至ってはいないが、いずれ都合をみて取り上げた。

(38)張承志はある「メロンと家」のエピソードを紹介した〔張 1993〕第131-132頁。嘉慶二十年（1815）ごろ、一人の新疆ジャフリーヤの回民が自家産の特大メロンを背負って甘肅に帰り、教派の指導者に捧げようとしたが、ある関所で清朝兵士に発見された。兵士はメロンを買い取ろうとしたが、回民は、メロンは老人家（指導者のこと）に献上するもので、いかなることがあっても売らないと返答したという。

系ムスリムを指す)の乱」である。反乱は天山北路を中心に広まり、ウルムチ在住のアホン妥明(別名妥得璘)をはじめとして多くの新教関係者が頭角を現した<sup>(39)</sup>。

#### 主要参考文献

中田吉信『回回民族問題』アジア経済出版会 1973年  
「乾隆帝の回教新派弾圧について」『東洋史論叢 和田博士古希記念』所収、講談社 1961年  
佐口 透「中国ムスリム社会の一側面—清朝実録より観たる—」『内陸アジア研究』所収、1955年  
『新疆民族史研究』吉川弘文館 1986年

呉 万善『清代西北回民起義研究』蘭州大学出版社 1991年  
張 中復『清代西北回民事変—社会文化適応與民族認同的省思』台北・聯經出版 2001年  
高 文遠『清末西北回民之反清運動』台北・学海出版社 1988年  
余 振貴『中国歴代政權與伊斯蘭教』寧夏人民出版社 1996年  
張 承志『回教からみた中国 民族・宗教・国家』中公新書 1993年  
張 承志著・梅村 坦編訳『殉教の中国イスラム—神秘主義教団ジャフリーヤの歴史』亜紀書房 1993年

附記：本論文は平成13～15年度日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究(C)「清代回民の新疆移住史の研究」の成果の一部である。

---

(39)高文遠 [1988] 第391頁。